

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	渡辺 和宏	学校名	東京都青梅市立第七小学校
担当教科等	音楽・外国語活動・図書	対象学年（人数）	1～6 年全校児童（46 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	令和 7 年 11 月～12 月（7 時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：総合的な学習の時間、図書、外国語活動、音楽		
2. 単元名と単元目標 単元名：世界と仲良くなるための一歩を踏み出そう～「バングラデシュ編」～ 単元目標：多文化理解を通して相手の背景や境遇に目を向け、他者と仲良くなるために積極的に相互理解をしようとする姿勢、相手（の心情）を想像しようとする態度を養い、多様性に気付くと共に、地球市民として他者や社会とよりよく関わろうとする態度を養う。		
3. 単元の評価規準	①知識・技能 ②思考・判断・表現 ③主体的に学習に取り組む態度	①バングラデシュという国を通して、その人たちが大切にしている文化や価値観があることを理解している。 ②世界へ目を向ける視点を持ち、違いを超えて共に生活していく必要性を理解している。 ①他国や他者の良いところを見つけ、何のために違いを認め合い、互いを尊重し、異文化共存をしていくのかを意識し、課題解決のための見通しをもっている。 ②共に地球市民として生きる仲間として他者と接する際にどう関わろうとするか自分の考えをまとめて表現している。 ③文化体験を通して、歌や言語を用いて積極的に相手と繋がろうとコミュニケーションをし、気持ちや思い表現している。 ①先入観や偏見をもたず、共感的な態度で国や地域の異なる文化や価値観を受け入れ、異文化への理解を深めようとしている。 ②世界の出来事を「他人事」ではなく地球市民の一員という立場をもって「自分事」として捉える視点を持ち、それらに向き合い、関わりを深めようとしている。
4. 単元設定の理由・単元の意義 （児童/生徒観、教材観、指導観）	【単元設定の理由】 全校児童 46 名、1 学年 3～11 名の小規模校である。学区域が比較的広区域で車がないと児童同士で会うことが難しいような地域で、近くに店や娯楽施設はあまり多くなく、学校と家庭、近所と非常に狭いコミュニティの中だけで生活している傾向にある。外の文化と触れ合うことが少ない環境にある児童たちにとって、世界は身近ですぐそこにあるということ、自分と違う価値観を大切にしている人がいるということに気づき、これから出会う様々な人との関係づくり、繋がりがづくりに役立てていけるきっかけとなつて欲しい。大人になるにつれ様々な人と出会っていく中で、国際色豊かになりつつある情勢に溶け込んでいけるよう、この授業を通して他者と仲良くなるための一歩を踏み出そうとするきっかけとなるよう、本単元を設定した。 【児童観】 自然豊かで過剰な情報が子供たちに入ってこないこともあってか、穏やかで優しく素直な児童ばかりである。現代の流行りに振舞わされることがない一方で、地域の外に出ることも少ないせいか、ものごと、できごと、社会情勢など知っていて欲しいようなことが知識として備わっていない児童も多い。小規模校なので児童同士のトラブルは少ない一方で、平和そのものとてもよい雰囲気である。しかし校内での交友関係に限られてしまうこともあり、自分中心、友達のことを考えた行動や発言が見られない場面があり、自分のしたいことだけをするとといった傾向も見られる。そこで、いろいろなことに挑戦したり探求しようとしたりする気持ちをもつことと共に、相手の立場に立って物事を考える力をもっと身につけさせたい。 【教材観】 バングラデシュという国を通して、自分たちの暮らしと他国の暮らしを比較することができるものとなっている。国際理解教育として他国の日常を知ることにとどまらず、自分たちとは違う暮らしをしている人々の様子を知っていくなかで、相手のことを思う機会を何度も持てるようにした。自分とは違う価値観を持っている人たちの生活を知り、すでに間接的にもっている世界の人々との繋がりがや、現在直接関わっている身近な人との共生のなかで、よりよく関わり合う方法を考えることができるようにさせていきたい。 【指導観】 1・2 時は全校児童縦割り班で授業を行い、3・4・5 時は低学年（図書）、中学年（外国語）、高学年（音楽）と絡めて授業を行い、6 時は再び全体で学んだことを発表すると	

	いう形式で授業を行う。年齢や経験が異なる学年で授業を行うことで、下学年は上学年の深い洞察や表現に触れることで刺激を受け、上学年は下学年の純粋な疑問や視点にハッとさせられることがあり、多様な視点や価値観の共有ができると考える。 まず、フォトランゲージで自分たちの暮らしとの共通点・相違点・疑問点・想像したことを班で出し合う。同じ写真を見てもそれぞれ異なる解釈や感想を持つため多様な視点や価値観があることに気付くことができる。他の班の写真を見たり気付きを聞いたりしながら、想像を存分に働かせ、視野を広げる。次にPPTを見ながらバングラデシュについて学ぶ。国を知ることが目的ではなく、今回はバングラデシュという国を見ていきながら、そのなかで「自分はどう受け止めどう動くか」という自分と相手の立場を行き来しながら考える機会を与え、明確な答えが出せないモヤモヤを体験させることで、答えがでないもの、すぐに解決には至らないことがあるということに気付かせたい。 学年別の授業では、文化体験として低学年には絵本の読み聞かせ、中学年はベンガル語での自己紹介や会話、高学年ではベンガル語の歌を取り入れる。どの学年にも共通して「ストリートチルドレン」「ロヒンギヤ難民」に関して触れ、自分がその立場で生活をしていたとしたら、「周りの人たちとどのように仲良くしていこうか」ということをいくつかの場面で考えさせる。また、ベンガル語で名前を書く体験も行う。 上記に加え、低学年は絵本の読み聞かせから登場人物の気持ちを考えたり、本からバングラデシュや外国の生活を見つけ出したりする活動を行う。これらの活動によって、低学年なりに自分たちとは違う暮らしをしている人たちがいること、外国という存在に気付かせたい。また、絵本を通して世界で起きている困ったこと、地球のためにできる身近なことは何かを考えさせる（SDGsの導入） 中学年は既習の英語での挨拶・自己紹介・好きなものを尋ねるやりとりをベンガル語で行い、日本語・英語・ベンガル語の言葉の響きの違いやよさや面白さに気付かせ、多言語のコミュニケーションを通して外国を身近なものに感じさせたい。好きなものの単語や、路上生活や難民のことを自分でもった問いをもとに調べ学習をし、調べたことをスライドでまとめる。ここではバングラデシュとミャンマーの2国間で起きている出来事を取り扱うことで、互いに仲良く共生していくための方法を考える。その考えは今隣にいる友達にもできているか、世界を通して自分ゴトに戻し、社会での共生に役立てさせたい。 高学年はバングラデシュでは誰もが知っている歌をベンガル語で歌うことで文化体験を行う。一度覚えた歌は頭に残りやすく、大人になっても忘れないという音楽の特性を生かし、将来バングラデシュの人と出会った際に仲良くなるための手段として児童にとっての良い武器としたい。また、路上生活や難民のことだけではなく、フェアトレードの視点で縫製産業や児童労働を取り上げ、「自分が働かなくてはいけなかったら暮らしはどうなるだろうか」「低賃金での暮らしを強いられたら周りどう協力して過ごすか」などを考える。服が手元に届くまでの仕組みを考える活動を通して、自分たちのモノの消費の仕方、買い方などを考え、生活の知恵をするだけでなく、見えないところで第三者と消費者が関わり合い、どうしていくことで共生していけるかの視点を持たせたい。
--	--

5. 単元計画（全6時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1 本時	写真から見つけたり想像したりして自分たちの暮らしと比べよう。	同じ地球に住む人々と自分たちの暮らしの様子を比べることで視野を広げ、自国中心のものの見方ができる。	【出会う】全学年 ・フォトランゲージでバングラデシュと出会う。共通点、相違点、疑問点、想像したことや感じたことを班で話す。 ・各班の写真を見ながら互いの気付きを発表し合い、他の写真や友達の考えから自分の視野を広げる。（縦割り）	・フォトランゲージ用写真
2 本時	バングラデシュやそこでの人々の暮らしを知り、相手に想いを馳せながら考えよう。	バングラデシュの概要を通して、自己と人との繋がりを見出し、国際的なものの見方ができる。立場を変えて相手のことを考える視点に立つことができる。	【知る】全学年 ・PPT資料を見ながらバングラデシュの基本的な概要、文化、日本との関わりなどを知る。 ・違う文化に対して、「自分はどう受け止めどう動くか」を考え、まずは「自分と相手」という視点でものごとを考える。（縦割り）	・PPT資料 ・ワークシート
3	バングラデシュやそこでの人々の暮らしを知り、相手に想いを馳せながら考えよう。	バングラデシュと日本との関わりを通して、自己と国や人との繋がりを見出し、国際的なものの見方ができる。立場を変えて相手のことを考える視点に立つことができる。	・日本とバングラデシュとの関わり、乗り物、特産品、現地の様子を写真で知る。 ・チョコレート为例にフェアトレードについて知り、失われていくものや人々の苦労があることを知り、このような生活が続くと、子供たちがどうなっていくかを考える。（教育が受けられないことによる負の連鎖） ・離れていても自分たちにもお手伝いできる方法はどんなことかを考える。（学年）	・PPT資料 ・ワークシート ・JICAワークショップ資料

4	異文化体験を通して感じたことを共有し、他国や相手への理解を深めよう。	バングラデシュの文化に触れ、異文化体験を通してバングラデシュを味わい、国際的な視野を広げることができるようになるとともに、自分の思いや考えを表現しようとする。	【触れる】 低学年…バングラデシュの民話の読み聞かせを通して、感じたことや思ったことを発表し合う。国旗の塗り絵や文字をなぞることで文化を体験する。 中学年…現地の文字に触れ、自分の名前をベンガル文字で書いたり、言葉の発音を聞いたりし、日本語とベンガル語を比べながら言葉の響きを楽しむ。 ・既習の英語の会話をベンガル語に置き換えた文章で自己紹介や挨拶、好きなものを尋ねる表現を学ぶ。 高学年…現地の文字に触れ、自分の名前をベンガル文字で書いたり、言葉の発音を聞いたりし、日本語とベンガル語を比べながら言葉の響きを楽しむ。 ・現地の子供や大学生と共に歌った映像を見て、「Amra Korbo Joy (আমরা করবো জয়)」の練習をする。(学年)	低学年 ・絵本 中学年 ・ベンガル語会話プリント、動画音声 高学年 ・同上 ・楽譜、交流動画
5	バングラデシュで起きている問題に目を向けて、自分が手伝えそうなことを考えよう。	バングラデシュの文化、またはバングラデシュで起きている現象と自分たちの生活との関わりを捉え、国益を超えた地球益の発想から物事を捉えるようにすることができる。 グローバルな見方で多様な文化的対立・緊張を、国境を超えて捉えようとすることができる。	【触れる・考える・調べる】 低学年…絵本の読み聞かせを通してバングラデシュで暮らす子供たちのことを知り、自分の暮らしと照らし合わせながら、比べたことや感じたことを発表する。 ・登場人物の気持ちを考え、自分がもしその暮らしをすることになったら周りの人とどう仲良くするかの方法を考えたり、もしその子と出会えたらどんな声かけをしたくなるかなどを考えたりして発表する。 中学年…会話の練習をし、自分の好きなものをベンガル語では何と言うか学習用端末を用いて調べ、好きなものを答える文章を完成させる。 ・エクマッタの取り組みや市民権を得られない路上生活者や孤児がたくさんいることを知り、これまで触れてきたことを含めて「もっと知りたいこと」など問いをもつ。 高学年…ベンガル語の響きを楽しみながら「Amra Korbo Joy (আমরা করবো জয়)」の練習をする。 ・「じゅんぴはいいかい？名もなきこざるとエシカルな冒険」の絵本を用いてフェアトレードについて振り返る。 ・縫製産業の労働環境とラナ・プラザ崩壊事故のことを知り、フェアトレードの問題は縫製産業でも起こっていることを学ぶ。 ・自分が着ている服がどのように作られ手元に届くのか時間軸を遡って考える。労働者がいるところまで行き着いたら、その過程ではどんな苦労や問題点があるのかを考える。 ・丸久の写真をを通して、これまで触れてきたことを含めて「もっと知りたいこと」など問いをもつ。(学年)	低学年 ・絵本 中学年 ・絵本 ・ストリートチルドレンやエクマッタの映像 ・PPT 資料 高学年 ・ストリートチルドレンやエクマッタの映像 ・ロヒンギャ難民についての映像 ・絵本 ・丸久縫製工場の写真 ・PPT 資料
6	バングラデシュで起きている問題に目を向けて、自分が手伝えそうなこと、自分だったらどう行動するかを考えよう。	多文化共生・多様性というものの気付き、それらの視点で自分ならどうするか、何ができるかを考えることができる。 グローバル／グローバルな見方との往復の中で、「自身と他者」の人間居住や「地域と世界」の捉え方及び相互の関連性に関する理解(最適解)を更新することができる。	【考える・調べる】 低学年…絵本の読み聞かせを通して世界で起きている困ったこと、地球のためにできる身近なことは何かを考え発表する。(SDGsの導入) ・外国の学校の様子や食べ物、遊びや生活など本から知ったことや気付き、相違点を見つけて発表する。 中学年…ロヒンギャ難民のことを知り、自分の問いをもとに班で調べ学習をし、1枚のスライドにまとめる。自分の生活と照らし合わせ、「自分ならどうするか」「誰のために何ができるか」を考える。 ・自分がバングラデシュの生活をするようになったらどう思うか、どうしたらバングラデシュの人となかよくなれるか考える。 高学年…自分の問いをもとに班で調べ学習をし、1枚のスライドにまとめる。自分の消費の仕方を振り返り、モノの買い方・使い方を考える。自分の生活と照らし合わせ、「自分ならどうするか」「誰のために何ができるか」今の自分の解決策を考える。(学年)	低学年 ・絵本 ・市の図書館の本 ・現地の商品 中学年 ・ロヒンギャ難民についての映像 高学年 ・縫製業に関する動画、丸久工場・ラナプラザ崩壊事故の写真
7	これまでの学習と発表を通して、世界の人と仲良くなるために自分	多文化共生・多様性という視点を持ち、世界と仲良くなるための一歩としてできることは何かという	【見直す】全学年 ・全体で学んだことを発表し合う。 低学年「本から見つけたバングラデシュ+α」(見つけたこと、興味を持ったことなど) 中学年「ベンガル語会話と調べたこと紹介」(あいさつ紹	・発表用写真やスライド、原稿

ができることは何かを考えよう。	考えをもつことができる。	介、自己紹介、会話、路上生活児童やロヒンギヤ難民について) 高学年 「バングラデシュの歌の発表と調べたこと紹介」(縫製産業を通して考えたフェアトレード、モノの消費の仕方、自分たちにできること) ・他学年の発表を見て、バングラデシュの他文化に触れる。 ・授業を通して変わったイメージや考え、地球市民として相手を知ること、世界と仲良くなるためにこれから自分ができそうなこと、始められそうなことを考え振り返る。 ・考えたことが「今身近にいる友達に対してできているか」「生かしていけることは何か」を考え、これからの生活に役立てる。 (学年・縦割り)
6. 本時の展開 (1・2 時間目) 本時のねらい：異文化を通して、互いに大切にしている文化や価値観があることを理解し、相手の立場を考慮した考えをもつことができる。		
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (5分) 展開 (40分)	○フォトランゲージの説明を聞く。 ○縦割り班ごとに写真を見て、「同じ」「違う」「どうしてだろう」「もしかして～かな」と感じたことを班で話し合う。  ○各班の写真を見ながら互いの気づきを発表し合い、他の写真や友達の考えから自分の視野を広げる。 ○友達の気づきや教師の解説から、この国の人々の暮らしの様子をより詳しく把握する。	・各班にファシリテーターとして教員を配置。児童が見つめることに集中するため意見の記録は教員が行う。  ・何をしているところなのか、児童が気付かなかった共通点、相違点、疑問点、想像に触れ、写真から感じ取れるイメージを児童に喚起する。 ・国名はまだ伏せておく。
まとめ (5分)	○全ての写真がある1つの国のものであることを告げ、次の時間にその国について学ぶことを知る。	

導入 (5分)	○先ほどの写真はバングラデシュという国だということを知る。	・バングラデシュの民族衣装で登場。
展開 (45分)	○班で協力し、世界地図を用いてバングラデシュを探す。 ○人口・面積を日本と比べる。 ○バングラデシュの5つの世界一を予想する。 ○バングラデシュで使われている数字や文字について知る。クイズで予想する。 ○バングラデシュの食べ物について紹介する。 ○食文化の違いから、相手が用意してくれたよくわからない料理を自分だったら食べるか、断るか、どう相手に反応し伝えるかを考える。違う文化に対して、「自分は受け止めどう動くか」を考え、まずは「自分と相手」という視点でものごとを考える。 ○自分たちが普段食べているものでも、外国の人からは嫌煙される食べ物があることを知り、相手に自国の食べ物を嫌そうにされている場面を想定し、自分の気持ちを考えるとともに、相手の思いを想像し、自分がしてあげられることは何かを考える。 ○次回からペア学年で一緒に活動すること、このあと勉強する内容を知り、次の活動の見通しをもつ。	・見つかりそうになかったら、おおよその位置を提示する。 ・情報を提示するだけでなく、予想したり考えさせたりしながら能動的に知識や情報を得ていけるようにする。 ・児童が「食べてみたい!」「おいしそう!」など前向きな反応をするか、遠慮気味な反応かを見る。ファシリテーターの先生にも反応を見てもらい、次の活動のアドバイスに繋げる。 ・相手は好意的に進めてくれているが、自分だったらどんな反応をするか、自分の気持ちと相手の気持ちの間に立って考えさせ、ジレンマを感じさせる。 (低学年は教員が発言を記録) ・一般的にという話で、例外もあることを伝える。自分たちの食文化を否定されたような気持ちを味わわせ、互いを理解することの難しさを感じさせる。 ・ワークシートの記入は宿題でやってくことを伝える。
まとめ (5分)		
7. 資料(教材) フォトランゲージ用写真、PPT資料、ワークシート		
8. 評価規準に基づく本時の評価方法		
【知技】発言、ワークシート 【思判表】発言、ワークシート、観察 【主体的】観察、発言、ワークシート		
9. 学校外との連携 なし		
10. 学びの軌跡 第1時で行ったフォトランゲージは児童にとってとても面白かったらしく、同学年で活動よりも異学年での活動にしたことで活発に意見が飛び交い、結果的に有意義な時間になった様子であった。 第2時では「あなたならどうする?」として相手が自分のために作ってくれた見たことのない食べ物に対して①あなたは食べるか食べないか②そうした時の相手の気持ち③どんな言葉で相手に思いを伝えるかということについて話し合った。また逆の立場で「あなたはどうしたい?」として外国の人に彼らが知らない日本の料理を紹介した時に①食べてもらいたいのか食べてもらわなくても良いのか②相手が知らない食べ物に出会った時の気持ちを想像する③食べたそうにしていない時どんな声掛けをするかを話し合った。43人中【食べる】が37人、【食べない】が6人、【食べてほしい】が30人、【食べてもらわなくてもいい】が13人だった。それぞれの理由として【食べる】には「食べてみないと分からないし、自分のためにせっかく作ってくれた気持ちを考えて相手を悲しませたくない」、【食べない】には「食材の衛生面や見た目が気になる」などの意見があった。【食べてほしい】という児童は「無理しなくても大丈夫だよ、一口でも食べてみてほしいけど、苦手だったら残してもいいよ」、【食べてもらわなくてもいい】という児童は「相手の気持ちを気にして何を食べたいのかを聞く」「別の料理をその相手と見ながら、相手が食べられるものを一緒に探す」などいずれも相手のことを気にしながら対応しようとする児童が多かった。しかし、【自分は食べない】けど【相手には食べてほしい】という児童も3人いた。自分の立場と相手の立場をどう優先させ、どう想像を働かせ相手を知るか、仲良くなるための第一歩として初めて考える場面になった。 「自分が路上生活や難民の生活をするようになったら、周りとうどう仲良くしていくか」 ・捨ててあるものを使って家を作る、畑を作って野菜を育て、作り方を教えて分け合う ・喧嘩をしないで協力しながら暮らす、皆が笑顔になる遊びをする、小さい子になるべく譲るようにする ・自分が大変でも他の人にも食べ物を分け、一緒に楽しく暮らしたい、スポーツで絆を深めて仲良くなる 「世界と仲良くなるためにできること」 ・まずは身の回りの人と仲良くすることから始める ・互いの言葉を覚え、国のことを教え合って助け合う、争いをしないで仲良くするために話し合うことが大事		

「相手を知るとどんなよいことがあり、知らないままだとどうなるか」

- ・互いに信頼が生まれ、国ごとに様々な暮らしや人がいることが理解でき、助けようという気持ちになる
- ・相手を知ることによって自分を知ることにつながる。他国と比較するから、自国がどうかも分かる
- ・知らないと相手の大変さを知ることができず、その国に行った時にもその大変さを知らないままになる
- ・孤独が生まれて、そのせいで命を落とす人がいるかもしれない

上記の問いに対してはこのような考えが個々の中で生まれ、これまでに考えたことのない問いに多く出会った。相手のこと、外国のことを自分ごととして捉え、自分とは違うが同じ地球市民として今の時点でできることやしていきたいことを考える視点を持つことができた。

また、家にある服などからバングラデシュ製品を見つけたり、フェアトレード商品を探したり買いに行ったりする児童もあり、さっそく自分ができる行動を起こしている児童がいた。

【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	旅行で訪れた印象ではなく、普段訪れることのできない場所や研修プログラムでの体験を通してバングラデシュという国を深く知り、バングラデシュのありのままの現状・魅力を極力そのまま見せたかった。1つの国を知ることによって児童の世界観を広げたいということはもとより、自分たちとは違う生活様式や暮らし方をしている外国の友達を通して、相手を知ることの必要性、知らないままだと世界がどうなっていくのかを考えさせ、これから出逢う様々な人や世界と仲良くなるために自分ができること、すべきことは何かという思いの種をもたせ、児童一人一人が自分の心の中でその芽を育てていける、そんな時間になる授業にしようと思った。
12. 苦労した点	縦割り班で全校授業→ペア学年→全校授業という流れにしたので、全教員の理解と協力を得ること、自分と同じ温度で授業のサポートをしてもらうことができるよう事前の説明以外にもワークショップを開き、先生たちにも国際理解教育の必要性を感じてもらいながら楽しんでもらう機会を作ること。もっと時間をかけて丁寧に進めていきたかったが、授業次数の確保が難しかった。
13. 改善点	フォトランゲージで児童が見つけたことを全班に発表してもらった後に教師が全ての写真の解説をしたが、写真1枚につき児童の発表→解説とした方がより記憶に残り考えが深まったと思う。児童がせっかく考え思いを馳せていたことや記憶を薄れさせてしまった。調べたいことや調べる時間をもっとじっくりとってあげたかった。
14. 成果が出た点	外国や外国人に対するイメージが変わった。外国には「〇〇がないから」から外国には「〇〇があるから」という自分の生活を中心にしたものから何かを引き算した考えから、自分たちの日常や当たり前を超えたプラスが外の世界にはあるということに気づかせることができた。バングラデシュを通して自分と同じ年の子たちの暮らしや文化を知ること、視野が広がり、3～6年生においてほとんどの児童が外国に興味を持ち始めた。 世界と仲良くなるために自分が今いる場所からできることは何か、そして自分が考えたことが今現在、近くにいるクラスの友達にできているのかを振り返り、まずはそこからスタートしていくことが大切なのだというを実感させることができた。
15. 自由記述	12月にバングラデシュを再訪した。研修をもとに興味を持った場所を訪れ、現地の縫製工場へ赴き話を聞き、エクタラやタブラ、ドゥグドゥギ（ドゥムル）、コモク（カマック）等の民族楽器を購入し、世界遺産であるシュンドルボンのマングローブを訪れた。研修を通して児童への還元だけではなく、自分への知識や経験、興味を与えていただいた。ローカルな雰囲気の中の生活体験ができたことだけでなく、エクマッタの渡辺さんと再会し、支援事業やこれからのビジョン、子供に対する熱い想いを伺った。インターンに来ていた大学生とも話をさせていただき、自分にとって刺激を受ける貴重な時間となった。3回目の訪問も考えており、ハルモニウムなどの楽器も購入し、子供たちと一緒にこれらの楽器を用いてバングラデシュの音楽をベンガル語で演奏する音楽活動をしたいと計画している。 今回の研修で得てことを生かし続け今後出会う子供たちにバングラデシュを題材にした様々な授業を教科の枠を超えて展開してける教員になれるよう邁進していく。